

19世紀後半期における農業年雇事情：パ・ド・カレ 県の場合

湯村，武人

<https://doi.org/10.15017/4475379>

出版情報：経済学研究. 49 (1/2), pp.1-16, 1984-03-10. 九州大学経済学会
バージョン：
権利関係：



19世紀後半期における農業年雇事情

——パ・ド・カレ県の場合——

湯 村 武 人

(一)

ピカルディ大学教授ロナル＝アンリ・ユブシエルが『19世紀中葉から1914年に至るパ・ド・カレ県における農業及び農村生活』(Ronard H. Hubscher, *L'Agriculture et la Société rurale dans le Pas-de-Calais du milieu du XIX^e siècle à 1914*, Arras, 1979)と題する、A5版の上下2冊、合計964頁にものぼる大部の著書を公刊した。

このユブシエル教授が1969年に発表した論文「農村下層民階層に関する知識への1貢献、フラオー家の会計簿」(*Une contribution à la connaissance des milieux populaires ruraux. Le livre de compte de la famille Flahaut [1811～1877].*)については、私は既に、本誌第43巻第4号所載の論文「19世紀フランス農村における年雇労働力」の中で紹介を済ませており、その秀れた論文内容に対して極めて高い評価を捧げておいた。

然し乍ら、今回公刊されたこの大部の著書については、それが著者の多年にわたる刻明な研究成果を博士論文として取纏めたものであるだけに、極めて秀れた業績であり、従って、われわれとしても学ぶことの多いことは十分に認め乍らも、些かの不満を表明せざるを得ない幾つかの点が見出されるように思う。これはおそらく、先の論文が「農村下層民階層」に的を絞っ

ていたのに対して、この著書の場合には考察の対象が「農業及び農村生活」全般に拡散されている結果とも考えられるが、私にはこのまま看過出来ない問題点が含まれているので、以下この新著の中の農業労働者及び農業年雇に関する部分の概要を紹介し、その後でそうした不満点を明示しておきたいと思う。

(二)

新著の検討に移る前に、私の上記論文の中でユブシエルの前記論文を紹介した個所を、もう一度引用しておく必要があらう。新著への私の不満は、主としてこの論文内容との対比から生れているのだから。

私の上記論文は、ユブシエルの前記論文が下層農民階層とりわけ年雇達が、刻苦精励して次第に土地持ち農民に成り上ったことを紹介しているとしたあと、次のように続けている。

「日雇労働者や年雇労働者たちが次第に土地持ち農民に成り上っていくこうした過程については、前章でその一部分を参照しておいたロナル＝アンリ・ユブシエルの論文が、とりわけ多くのことを教える。この論文は、パ・ド・カレ県ベテューム郡カンブラン小郡に約100ヘクタールの所有地をもつ、自ら経営する土地所有者アルベール＝オーギュスト・フラオーが遺した詳細な会計簿を利用して、19世紀における農村下層民衆の状態を究明した極めて秀れたもので

ある。この論文によると、同家は時期によって変動する12～15人の雇い人 (le personnel salarié) の協力によってその経営を行なったが、その雇傭する労働者は、次のようなカテゴリからなりたっていた。……(中略)……。これらの労働者たちのうち、(ロ)の自らも経営地をもつ日雇労働者と(ハ)の年雇についてだけもう少し詳しく見ておけば、前者の日雇農の経営地は1ヘクタール70から4ヘクタール60の間、最も普通は2ヘクタール50の規模であり、それらの土地は、自作地であることもあったが、多くの場合は小作地であった。彼らはそれを殆んど家族労働によって耕やしたが、耕起とか、収穫物や肥料の運搬などの作業についてはフラオー家側の協力を得た。

次に、われわれ当面の関心事である年雇労働者に関する個所を、そのまま引用しよう。《自らも経営地をもつ労働者と住込み奉公人 (serviteurs) とをつなぐ蝶番の位置にあって、自らも経営地をもつ年雇たちは、きわめて独自な1つのグループを構成している。彼等は、年極めで雇われているが、それでもなお、時として主人側の助力をえて、自分自身の計算で耕作するいくつかの小地片を経営している。多くの犁夫の場合、特にそうである。

このグループの特徴を最もよく代表する事例は息子のルイ・エルヌー (Louis Hernu fils) のそれである。なぜなら彼は、自らの経営地をもつ労働者 (ouvrier exploitant) から自らの経営地をもつ年雇 (domestique exploitant) への転化をわれわれに示してくれているからである。彼についての記述がフラオー家の記録に最初に現われるのは1825年である。彼はその時、その経営が前に述べておいたような方式によって保証されている、1ヘクタール半の面積をもつ若干

の畑を小作していた。1829年に、1つの重要な変化が彼の身分の上で明らかになる。彼は年雇として傭われ、彼の妻はそのまま女日雇農として働き続ける。それでもなお、彼はその耕作を放棄しない。それどころか、今や雇主のほうで、彼にいろいろの無償の提供を保証する。

何故にこんな進化が生じるのか。おそらくは、18世紀において既に指摘されており、この型の協力関係に固有であると思われる1つの現象の故にであらう。すなわち、職分の不可避免的な滑走が生じ、利害の中心点の論理的な転位が生じる。労働者たちは少しずつ労働者ではなくなり、次第に益々、自分の利益で経営する耕作者になり変っていく。彼らが、ありとあらゆる犠牲に耐えて目指している目標は、自らを大きくすることであり、独立したものになることである。雇主に捧げる時間は大幅に減る。雇主側は結局、もはや勘定に合わなくなり、労働力を欠くことになる。かくして、長期的にみると、この制度は雇主側に不利であることを顕明にさせる。おそらくは、ここにこそ、この制度がフラオー家では1836～1838年頃姿を消した理由がある。…

工業的諸中心地にむかっての下層農民たちの離村と共に、労働力の保存の問題が次第に益々不安の度を昂めるような関係において課されてくる。バ・ド・カレ県では、鉱山からの吸引力が著しかったので、農業者側は守勢に立たされ、われわれが前に述べたように、労働者や年雇たちが所有している畑での若干の作業を無償で行なうことが、一般的な慣行になっていく。これは、彼らを土地に繋ぎ留めるための極めて重要な因子の1つである。

いずれにしても、エルヌーに与えられた新しい状態は、悪くはなかったようである。彼は、自分を召使と同じように不安から庇護してくれ

る給金を受取り、且つまた、自分の経営地の上で遂行される耕耘作業に対して、もはや何の支払いをする必要もない。この時以後、彼のフラオー家との間の勘定は常に黒字である。彼は毎年屠せた豚1匹を彼の主人から買っており、1831年には牝牛1頭を買う。この年以降、彼は定まって甜菜を栽培してそれを主人側に売り、代りに主人側から麦を買い入れる方式を選ぶ。1834年には、ベテュームの公証人の許に100フランを持参している。この金は、おそらく若干の地片の購入に当てられたものと想像できる。……

要するに、自らも経営地をもつ労働者のカテゴリは、その日雇たると年雇たるとを問わず、極度に活動的で素晴らしく勤勉なグループの印象を与える。絶え間のない努力によって、さらにまた、極めて苛酷な労働と艱難辛苦に耐えて、彼らのうちの或る者たちは、たとえ土地所有者ではないまでも、独立の小経営者の水準にまでよじ登る。小耕作者がしばしばその出身をひき出すのはこの集団からである。』¹⁾

(三)

さてユブシェルの新著だが、前にも述べたようにこれはA5版で上下巻合計964頁にも及ぶ大著である。そして、その第1部「19世紀中葉における農村生活の構造」と第2部「農業進歩を積極的に推進した諸因子：農業協会と産業的経営者」とを収める上巻(340頁)では、19世紀中葉におけるパ・ド・カレ県農業の概観とその積極的な推進者としての農業協会並びに産業的農業者(les agriculteurs industriels)〔彼はまた、農業の将帥たち les capitaines d'agriculture、及び《進歩的》農業者たち les agriculteurs 《pro-

gressistes》とも述べている〕について述べられている。次いで、ヨリ大部な下巻(341～964頁)において、第3部「農業の市場経済への挿入」及び第4部「ヨリ均衡のとれた、が然し限られた展望をしか持たない社会」が展開される。尤も、この第4部のタイトルは、それだけではその内容を推測し難いと思われるが、この部が次の5つの章、すなわち第11章「19世紀後半における人口の進化と社会的・職業的構造」、第12章「地主と経営者：1つの新しい与件?」、第13章「下層民大衆：安定さの増した1つの階層」、第14章「移動可能性と社会構造」、第15章「農村の人々の財産」から構成されていることを付けえれば、農業年雇とその社会的上昇とに関して知らうとするわれわれの要望に直接に答えるのが、主としてこの第4部であるという見当がつくであらう。だが、その前に第3部第9章「膨脹の諸結果：収入と賃金」を簡単にでも見ておく必要がある。

ユブシェルはここで、19世紀のパ・ド・カレ県農村では、市場経済に「挿入」された結果として、日雇労働者の賄いなし賃金が、例えば

年次	賃金	賃金指数
1848年	1.10フラン	97
1852年	1.13	100
であったのが		
1862年	1.67	148
1882年	1.95	173
1892年	1.72	152
1902年	1.96	173

と騰貴したことを指摘したあと、次のように述べている。すなわち彼によると、農業年雇は特別技能者(les qualifiés)と非特別技能者(les non qualifiés)とに分類出来る多くの種類に分れており、前者には犁夫(les valets de charrue)

1) 「経済学研究」第43巻第4号、20～22ページ。

や羊飼 (les bergers) が、後者には年雇女 (les servantes de ferme, ou de cour) や手伝い年雇 (les valets de ferme, ou garçon de cour) が所属するが、われわれの利用しうる史料は、残念ながら、例えば1852年の10年毎調査や明らかに年次別農業統計書の場合がそうであるように、年雇全体の中のとりわけ後者、すなわち《manœuvres》(雑役夫) に関するものでしかない。然し、幸いにも1900年に県会の要請にもとずいて公刊された『19世紀のパ・ド・カレ県』(Le Pas-de-Calais au XIX^e siècle) が、「半世紀後の出版物であるのでその数字をそのまま利用することが出来ないのは明白だが、比較的に実際に近い評価と見做しうる」とし、ユブシエルは下の第1表を掲げている。

すなわち、農業年雇給金の騰貴は農業労働者のそれより激しく、女年雇の如きは倍にさえもなっていることがわかる。而も、この世紀の最後の20年間に生じた一般的な賃金低下傾向（日雇労働者で約10%）にも拘わらず、年雇賃金は低下を免れている。たとえ特別技能のない年雇のそれが3~4%程度低下したとしても、特別技能年雇の報酬はその騰貴傾向を崩していない。「事実、経営の良好な運営は、次第に益々徴募が困難になってき、その結果、それを労わった

りその安定性の保持に努めたりすることが必要になってきたこれらの年雇たち (personnel permanent) に、大幅に依存していた。さらに、これらの数字を読むに当っては、もう1つの指摘がどうしても必要である。すなわち、賃金の騰貴は、特別技能をもった年雇 (les domestiques spécialisés) のそれよりも、副次的な作業をする年雇 (personnel subalterne de la ferme) の場合の方がヨリ急激であった。この騰貴運動の大きさは、出発点の水準が極めて低かったということと同時に、その労働が特別に嫌な骨の折れる性質のものであったということによって、説明がつく。雇主たちは次第に益々候補者を探し出せなくなった。女年雇の例は、この点でとりわけ教えるところが大きい。」²⁾

そしてユブシエルは、ここで、前に見たフラオー家の会計簿に依拠して、〔但しこの新著は19世紀中葉以降の農業の変化を対象とするものであるために〕1851年以降における年雇賃金の動向と、1851年のそれを100とする年雇賃金指数の年次的変化表を掲げている。然し、このフラオー家の会計簿はもともとはそれよりも古い1811年からの年雇賃金分も記録しているのだから、私はここで、この1851年からさらに1811年

2) Hubscher, L'Agriculture....., pp.572~573.

第1表

	valet de charrue		berger	valet de ferme		servante de ferme	
	年 給 金	賃 金 指 数	年 給 金	年 給 金	賃 金 指 数	年 給 金	賃 金 指 数
1848—52	212フラン	100	—フラン	147フラン	100	92フラン	100
1858	—	—	—	208	141	121	132
1859	—	—	—	224	152	135	147
1862	284	134	380	272	185	177	192
1882	350	165	431	314	213	238	259
1892	375	177	439	304	207	277	247
1899	399	188	—	337	229	278	302
1906	404	191	510	344	234	284	309
1911	400	189	498	340	231	290	315

にまで溯った約65年間の全賃金額と、1811年の賃金を100とする形に改めた全賃金指数とに作り直して、第2表を作成しておいた。

尤も、この第2表に示されている給金額は県の平均額よりも高い。然し、「このことは何ら驚くに当らない。この経営が位置しているラブルース村は、炭坑地帯の真只中に位置しているからである。こうした現象は、パ・ド・カレ県では珍らしくない。」³⁾次に、女年雇の給金の増

第2表

	賃 金 額			賃 金 指 数		
	犁夫	羊飼	女年雇	犁夫	羊飼	女年雇
1811	フラン 132	フラン 180	フラン 75	100	100	100
1818	135	—	—	102	—	—
1823	—	—	78	—	—	104
1828	150	—	—	114	—	—
1833	—	221	—	—	123	—
1835	—	—	84	—	—	112
1836	—	—	90	—	—	120
1838	155	—	—	117	—	—
1845	—	240	—	—	133	—
1847	160	—	—	121	—	—
1851	160	240	90	121	133	120
1852	—	—	96	—	—	128
1853	165	240	96	125	133	128
1854	—	250	100	—	139	133
1855	165	250	111	125	139	148
1856	170	260	—	129	144	—
1859	—	—	132	—	—	176
1860	—	—	144	—	—	192
1861	—	—	180	—	—	240
1865	—	—	240	—	—	320
1866	248	300	—	188	167	—
1867	264	300	240	200	167	320
1869	—	360	—	—	200	—
1870	—	387	—	—	215	—
1871	279	396	—	211	220	—
1872	312	—	—	236	—	—
1873	354	—	396	268	—	528
1874	402	—	—	305	—	—
1875	420	—	420	318	—	560

加が特に著しいことがわかる。それは、この半世紀を通じて絶えず騰貴している。但し、その騰貴率は、19世紀の前半期中は、まだそれほど甚しくはない。「事実、19世紀の前半には、この地方はまだ全く農業地方であつて、耕作者たちをしてその年雇たちの給金を標準値以上に増やすように強制する何の理由もなかった。」然し乍ら、19世紀も後半になると、事態は一変する。「要するに、1852年から1880年にかけての30年間に、日雇労働者の賃金は約70%騰貴したが、年雇の給金は2倍ないし3倍になった。次の15年間に、農業労働者の賃金は10%減少したが、年雇のそれは依然として安定したままである。一般的にみて、賃金は、厳しい打撃を受けた地主の収入や耕作者の粗収入に較べて、ずっと良好に維持されていた。」⁴⁾

ユブシェルは、その著書の第11章「19世紀後半期における人口の動向と社会的・職業的構造」の第3節「《人手の不足》：神話と現実」において言う。「農業協会は警告の叫びをあげた最初のものであったが、少くとも1866年迄は、問題は極めて一般的な形で課されていた。例えば、サン・ポールで、1845年に、《村々の労働力の若干の流出》が確認されている。1850年にブローニュの農業協会は、都会的職業が農村の人々、とりわけ耕作者の子供たちに対して及ぼしている幻想的な魅力を慨いている。……それから8年後に、ベテューム地方の農業者たちは、鉱山の及ぼす致命的な影響を告発している。《炭田の発見による増加以上に慨かわしいものはない。石炭業はまだその発展の端緒にしかないが、既にその影響の及ぶ地帯内で、農業労働者の半数以上を吸収した。われわれの手許に残留している者もその農場への愛着の点で動揺している。》

3) Hubscher, L'Agriculture……, p.574.

4) Hubscher, L'Agriculture……, p.575.

1866年には議論は全国的規模で提出され、農民離村に関係のある幾つかの数の質問が農業アンケートの中に姿を見せしている。……1884年のアンケートもまた、人口減少の問題に場所を与えている。時期的に極めて以前に溯らせることは決して行われてはいない。ここでは数年前からであり、かしこでは10年前（この数字が最もしばしばである）からであり、他の場所では15年程前に溯る必要があるとされた。都会、鉄道、そしてとりわけ鉱山に向つての出発を説明するべく挙げられている理由は、質問をうけた人々の社会的・職業的所属の異なるに応じて異なる。ある者は農業の苦しみを、ある者はヨリ多く稼ぎ而もヨリ少なく働きたいという希望や、仕事不足ではないにしても農村の賃金の不充分さ、を挙げている。』⁵⁾

第3表 マルル鉱山会社⁶⁾に登録されている
農村出身の坑夫数

年次	坑夫数	年次	坑夫数	年次	坑夫数
1853	6人	1869	60人	1885	40人
1854	8	1870	97	1886	28
1855	4	1871	118	1887	69
1856	10	1872	145	1888	101
1857	22	1873	188	1889	189
1858	166	1874	121	1890	326
1859	64	1875	170	1891	149
1860	53	1876	195	1892	136
1861	70	1877	121	1893	133
1862	66	1878	95	1894	104
1863	99	1879	46	1895	202
1864	28	1880	33	1896	255
1865	39	1881	78	1897	275
1866	41	1882	96	1898	170
1867	89	1883	84		
1868	71	1884	91		

5) Hubscher, L'Agriculture……, p.657.

6) マルル鉱山会社 (la compagnie des mines de Marles) はパ・ド・カレ県ウダン小郡に位置する同県の最も早く開坑された炭坑の1つであり、ノール県及びパ・ド・カレ県の炭田地帯の真只中にある極めて中心的な炭坑である。

そしてユブシエルは、特に炭坑について、左の第3表を掲げて、その農業労働力不足への明白な影響を立証している。

なお、この炭坑の坑夫総数中に占める農村出身坑夫の%(a)、並びに県内出身坑夫中に占める農村出身坑夫の%(b)は、第4表の如くであった。県外出身坑夫の大部分はノール県出身、次に多いのはベルギー出身であった。そして、それら県外出身坑夫の場合は、既にそれ以前から坑夫であるか労働者である場合が多かったが、県内出身者の場合には、比較的農村から直接の出身者が多かった。

第4表 農村出身坑夫の割合

	1860—1863	1870—1873	1880—1883	1890—1893
a	55%	48%	50%	63%
b	67	52	54	63

次に、「1853年から1898年にかけてマルル炭坑にその名を登録されていた農村出身者の社会的・職業別の人数」表を掲げる。第5表である。

第5表 農村出身者の社会的・職業別出自

出身の職業	人数	%
日雇労働者	3,398人	73
役畜持ち農夫	237	5
年雇	247	5
職人、商人	763	17

そして、人口のこうした社会的移動の結果としてパ・ド・カレ県農村の男子有業人口の職業別構成が如何に大きく変ったかを示すのが次頁の第6表である。

ユブシエルはさらに、県水準から地方的水準にまで分析の対象を移すことによって、この間の農村社会に生じた変化がどのようなものであったかがヨリ明瞭に示されるとして、もっと詳細な分析を行うために25村落を選定し、その資

第6表 1851年及び1911年の人口調査による
パ・ド・カレ県農村の男子有業人口の
職業別構成(%)の変化

	1851年	1911年
自作農	} 20.4%	10.5%
小作農		
農業労働者及び年雇	35.8	14.5
経営者(大工業)	0.7	0.6
労働者(大工業)	5.8	39.9
経営者(小工業)	11.9	10.5
労働者(小工業)	15.7	15.1
自由業	2.0	0.8
役人	4.5	5.6
奉公人	3.2	1.0
その他各種	—	1.5
計	100.0	100.0

料を利用して、第7表を作成している。⁷⁾

(四)

前節で見たような日雇労働者や年雇などの大量流出は、当然にもパ・ド・カレ県農村の諸構造に著しい影響を及ぼさずにはおかない。ユブシエルの著書の第4部を構成する前に挙げた諸章のうち、とりわけ第12章、第13章、第14章等

7) この25村落の選定方法については、私は少なからぬ疑問を持つているが、このことは後節で纏めて取扱う。

が、さらに一層興味深い分析結果を提示してくれる。

まず、第12章の第3節「家族型経営の確認」から見て行こう。

ユブシエルは、1862年、1882年、1892年の3つの農業統計に依拠して、パ・ド・カレ県農村における経営規模別経営者数の構成(%)の推移を示す第8表(次頁)を作成している。⁸⁾

この第8表についてユブシエルは言う。

「小規模経営の上向圧力、中規模経営のその規模に応じて逆の方向への変動(20ha以下の停滞、20~40haの明白な減少)、大規模経営の後退、これが大きな特徴である。この中規模経営の後退は、一般には中規模農場は、その規模が最も満足すべきものであり19世紀末から20世紀の初期にかけて農民たちがそれを目指して進んだものと見做されている経営であるだけに、その特異さを強調しておくのが妥当であらう。」⁹⁾

8) 5ヘクタール以下の規模の経営については、一般に農業統計書の信頼度について疑問をもたれており、ユブシエルもまたその故にこの表から除外している。

9) Hubscher, L'Agriculture……, p.740.

第7表 1851年から1911年にかけてのパ・ド・カレ県男子有業人口の職業別構成の変化傾向

	実 数					増 減 (%)				
	1851	1872	1881	1891	1911	1851—1872	1872—1881	1881—1891	1891—1911	計 1851—1911
地主	79	105	86	70	40	+33	-18	-19	-33	-49
役畜持ち農民	496	547	602	620	662	+10	+10	+3	+7	+33
小 農	220	166	92	64	45	-25	-45	-30	-30	-80
日雇及び年雇	734	680	740	754	647	-7	+9	+2	-14	-12
経営者	310	308	374	334	264	-1	+21	-11	-21	-15
労働者—職人	127	62	69	76	83	-51	+11	+10	+9	-35
労働者	360	275	241	221	575	-24	-12	-12	+173	+60
自由業	19	19	22	20	26	0	+16	-9	+30	+37
役人、自治体職員	67	67	84	71	69	0	+25	-15	-3	+3
使用人	—	6	23	11	24	—	+283	-52	+118	+300
奉公人	43	53	43	36	35	+23	-19	-16	-3	-19

第8表 経営規模別経営者数の推移(%)

年次	5—10ha	10—20ha	20—40ha	40ha—
1862	43.7	28.0	17.8	10.5
1882	46.1	27.9	16.2	9.8
1892	49.2	27.7	14.3	8.8

ユブシエルはさらに、前出25村落の資料に依拠してより詳細な検討を行ない、その結果を次のように纏めている。

「極小経営は後退し、小記営は発達し、10haから20～25haまでの間の経営は停滞する。これに反して、それより上層の諸経営においては凋落が明白である。異なった諸調査の間に生じた変化の検討は、19世紀中葉における連続した20年間での、小経営の上向圧力を示唆している。それは農村の下層民衆の土地渴望を物語る。運動は極めて規模の小さい諸経営については1881年迄力強く続行されるが、それよりも上層の水準では衰弱する。この年次以降、小経営の2つのタイプが逆の方向に進化する。第1のタイプは、とりわけ1891年以降に後退を蒙る。この型の経営は、総体としてみると経済恐慌によっては僅かの影響をしか受けなかったようだが、逆に19世紀末の農民離村の進行の影響をうけた。第2の型は間断のない上昇を経験しはするが、景気後退期には窒息する。最少限度に切り詰められた固定費用、商業的な且つまたその方向を容易に修正することの可能な部門への比較的に大きな依存、が経済局面への適応の柔軟性を物語る。世帯を構成するメンバーによって必要な場合には承認される犠牲が、困難な諸年次の岬を成功裡に乗り越えることをそれらの経営に可能する。このことが、世紀初めに、家族的労働力による小経営が勝利することの理由である。県の生産物の多様性、そしてとりわけ工業用作物の占める地位が、その活力を保証する。

その上位に位置する階層の場合には、安定性は1881年迄は勝利している。次の10年間に一時的に傷つけられた後、ついで再びまさに50年代の水準に戻って落着く。これは、その衰退が20世紀の初めまで続き、而も1872年と1881年の間に40%台という、とりわけ急激な失墜を伴った20～50haの経営の場合とは、距るところが大きい。後者は恐慌の期間中底に沈んでいる。この階層は、1911年における明白な再建にも拘わらず、1851年に占めていた地位を再び見出すことから程遠い。面積、労働力、用具、資本、及び生産の間の不均衡が、こうした脆弱性を理解させる。この階層の経営は複雑な性格を呈し、小経営と大経営とに同時に接しており、その長所を持たないで短所だけを目立たせており、この階層の抵抗力が最も弱いのはその構造それ自体の持前ではないかと問うことが出来る。然し、限界的な諸経営が排除され終ったあとは、はっきりとした回復が認められる。大経営の階層については、分析は比較的に限られた事例についてしか行なわれておらず、それだけに慎重な結論をまとめるのが妥当であらう。1880年頃に終った後退期のあと急速に安定化した再建期が始まる。但し、進化は大農場の2つの型について同じではない。大経営のうち100haを超えることのないものは、1872年以降安定し、19世紀の最後の10年以降再建が開始される。1851年と1911年の間に、損失は僅か(－10%)であり、恐慌には十分に耐えられたようである。これに反して、巨大経営は、その中心(－64%)が1851～1881年の期間に生じたところの真の崩壊(－79%)を経験した。¹⁰⁾

「要するに、経営数はパ・ド・カレ県では増加した。なぜなら、25村落に関して見る場合、

10) Hubscher, L'Agriculture……, pp.744～745.

その増加率は20%台であるからである。そしてこの現象は、1880年のあたりでその頂点に達した小経営、とりわけ極小経営の増加に結びついていた。それに平行して、20ha以上の面積の農場、そしてとりわけ20haから50haのそれと100ha以上のそれとは後退する。但し、この年次以降は細分化は停止し、極小経営は衰退を印する。その理由を説明するのは、経済恐慌よりもむしろ農民離村である。逆に、景気後退の局面はそれより規模の大きい諸カテゴリ、とりわけ中規模の諸農場にヨリ大きい影響を及ぼした。然し、1900年代になって、逆方向の運動が描き出され、中規模並びに巨大規模の農場の再建が鞏固に描き出されるが、それでもなお、1851年の水準に到達するには程遠い。¹¹⁾

変化は、自作か小作かという経営様式に関しても生じる。

「調査には厳密さが欠けているので、この期間における経営様式の推移を正確に辿ることは出来ない。然し乍ら、1862年にも1882年にも、最も頻繁に見られる経営様式は自小作経営 (culture mixte) であったことに注目しよう。但し、小作経営が19世紀の末頃になって再び増える。1882年には58%が《直接経営》に、42%が《間接経営》に所属しているが、10年後には関係は逆転し、前者には41%が、後者には59%が所属する。然し、こうした%は明らかに誇張されているのであって、ほんとうは、1882年には計算に入られていなかった口頭での貸付が1892年には加算されている。けれども、1929年にはこうした過程は完成し終っていたように思われる。土地面積の58%が小作方式によって耕作され、自作方式で経営されたのが42%である。然し、この同じ年次においてもなお、自小作経営は依

然としてこの県の特徴をなしていた。大戦の前夜に、《小作制度はこの県に大変普及しているが、最も多数の小作農は同時に小ないし中位の土地所有者でもあり、中ないし大の小作農達はその経営地の若干部分 (1/3 ないし 1/2) を既に自己所有地として所有しており、しばしば、これらの人々は、自己所有地部分を拡張すること以外の野心を持合せていなかったことに注目せねばならない。》¹²⁾ そしてユブシエルは、この個所に注して、自作経営者数28,005人、小作経営者数27,798人、自小作経営者数31,276人という数字を掲げている。

最後に、当時のパ・ド・カレ県農村の変化についてのユブシエルの要約を掲げておこう。

「われわれは、19世紀後半における土地所有と経営との推移についての論争点に触れることによって、この章を終ることにしよう。それは、数多くの解釈、議論、及び意見を喚起した。人々はしばしば、小土地所有と小規模経営との発達を力説したし、それもまた理由がなかったわけではない。然し、多様かつ複雑な現実についての充分な知識の欠除の故に、その重要性が過度に評価されたように思われる。依拠された資料の量の少なさにも罪を着せることが出来る。

この県について、人々は何を検証しようとしたか？ J. ラモー、A. ドマンジョン、R. ブランシャールが、幾つかの個人的な現地調査や、幾つかのモノグラフィと評価に基礎をおいて県会の後援の下に1900年に公刊された著作物の提供する様々な情報やに依拠して、その見解を述べている。……ドマンジョンによれば、農業恐慌期間中のアルトワ地方では、地主達はその所有地を大きな集塊単位で貸付けることを諦め、それを小さな地片単位で、有利な値段で、

11) Hubscher, L'Agriculture……, p.746.

12) Hubscher, L'Agriculture……, p.747.

日雇農や小規模の耕作者に売りつけた。アンシィでは、《ほんの20年ばかり前から、以前は日雇労働者であって現在は土地持ちになっている者たちが、数ダースも数えられる。……かくして、土地持ち農民の階級は増加することを止めない。……》そして彼は、《農民的小土地所有は、土地の征服にむかって停ることなく前進している》、と結論している¹³⁾。こうした判断に及ぼしているA. ド・フォヴィルの影響力は明白である¹⁴⁾。実際には、日雇労働者達の所有地の衰退は、織物業労働者達のそのの衰微については語らなくても、その増加よりも大きい。小農民 (ménagers) たちの間では、購入者によりも販売者の方にヨリ一層多く出合う。¹⁵⁾

要するに、農業恐慌は階層の上下を問わずすべての農業経営に打撃を与えたのであって、「以前は日雇労働者であって現在は土地持ちになっている者」が数ダースいる反面、同時に彼等下層農民階級の間にも土地喪失が進行するのが見られた、というわけであらう。

(五)

何れにしても、こうした農民離村の進行が、引き続いて村に留まっている下層農民達の境遇改善に役立ったであろうことは十分に推測される。そしてそのことが、元農業年雇や元日雇農民たちの社会的上昇を助長するのにもまた当然である。

「こうした進化は農村の下層民階級の多様化に辿りついたし、そしてこのことが、おそらくはこの期間の重要な特徴である。19世紀の半頃

には、こうした階級は、一般にひどく貧乏な暮らし振りをしている比較的的同質の一全体を構成していたが、1900年代になると、そうした場景は全く見られなくなってしまった。この階級の内部に、死物狂いの努力を代償にその境遇を改善することに成功した日雇労働者や年雇たちの、無視することの出来ない小部隊が浮び上ってきた。」¹⁶⁾

ユブシェルの著書の第14章は、前に挙げた25村落における1851年、1872年、1881年、1891年、及び1911年の住民名簿 (listes nominatives) を利用して、この1851～1911年の期間における「農村の人々の社会的・職業的移動」を調査し、この移動が次の如くであったことを示している。

第9表 25村落における社会的・職業的移動
(1851—1911)

期 間	絶対数	安定	昇進	低落
1851—1872	498	62%	29%	9%
1872—1881	641	73	18	9
1881—1891	549	81	16	3
1891—1911	330	73	18.5	8.5

ユブシェルはさらに、特に日雇労働者 (journaliers, manoeuvriers) 及び年雇 (domestiques) に関してだけ、以下のようなヨリ立ち入った調査結果を提示している。

まず日雇労働者の場合を示さう。日雇労働者は、上記の期間中の上記25村落において、その37%が身分を変えた(安定 204, 昇進 125, 低落10)が、この中の「昇進」部分についてだけその「道順」(itéraires)を示すと、次の第10表の如くである。なお、この「道順」を示す1, 2, 3……等の数字は、次のような社会的・職業的カテゴリの略号である。

13) Demangeon, La Picardie, pp.341～342.

14) A. de Foville, Le morcellement: études économiques et statistiques sur la propriété foncière, 1885.

15) Hubscher, L'Agriculture……, p.749.

16) Hubscher, L'Agriculture……, p.789.

- 0 《職業なし》, 乞食
- 1 年雇, 日雇労働者
- 2 人身に結び付けられて身の廻りの世話をする奉公人, 労働者 (抗夫, 石切工, batteur d'huile, 織維業労働者, 製造労働者, ouvrier d'état)
- 3 森林看守, 密猟監視人, 田園監視人, 道路工夫, 門番, 植木屋, 羊飼, 粉屋の下働き, 煉瓦工, 椅子の藁の詰め替え職人, 製籠工, 製造所の使用人, 小農 (ménager) [但しこの場合は活動的な生活から隠退した人]
- 4 税関吏, 郵便配達夫
- 5 artisan d'état, 漁師, 船頭, 行商人, 荷馬車屋, 使用人 (とりわけ鉄道の), 居酒屋, 小学校の先生
- 6 役畜持ち農民 (cultivateur), 肉屋, 食料品屋, パン屋
- 7 富裕な役畜持ち農民 (cultivateur aisé), 僧侶
- 8 農産物商人 (鶏屋, 粉屋, 家畜商, 穀物商, 穀粉商), 石炭商, 煉瓦工場主
- 9 地主, 年金生活者, 卸商人, ビール醸造業者, 油ないし砂糖工場主
- 10 自由業

第10表 日雇労働者の昇進

道 順	絶対値	昇進者中の%
1—2	10	8
1—3	28	22
1—4	24	19
1—5	12	10
1—6	50	40
1—7	—	—
1—8	1	1

そしてユブシエルは、この第10表を解説して言う。

「土地の及ぼした魅力は注目に値し、自分は自分自身の主人でありたいという考えが大部分の人々の心を動かした。日雇労働者の昇進の59%を道順4と6で占めている。彼等にとって、社会的上昇は独立を経由して得られるものであり、それは農業的職業の枠内においてであると考えられている。職人とか労働者とかいう身分に対する相対的な無関心がそのことを立証する。あらゆる予想を裏切って、最も頻繁な道順は日

雇労働者を直接に経営主へと導いている。そこそが彼等の渴望の実現である。」¹⁷⁾

彼はさらに付け加えている、「この離陸 (décollage) は2つの前提を予想している。まず第1に、家族員数が少なくなければならない。このケースは、その40%の場合が独身者か子供のいない家庭である。子供1人の夫婦を加えると昇進中の65%という数字に達するし、子供2人の夫婦を加えると82%を占める。……年齢が第2の必要条件である。すなわち、経営主になれるのは晩年になってからである。……われわれの日雇労働者をその到達点で捉えると36%が60歳を超えており、80%が50歳を超えている。」¹⁸⁾

なお、日雇農からの昇進の道順を年次区間別に示すと第11表になる。

第11表 日雇農からの昇進の道順の時期別内訳

道 順	1851—1872		1872—1881		1881—1891		1891—1911	
	絶対値	%	絶対値	%	絶対値	%	絶対値	%
1—2	4	8	1	3	1	4	4	22
1—3	11	23	7	20.5	7	28	3	17
1—4	11	23	6	17.5	3	12	4	22
1—5	8	17	3	9	1	4	—	—
1—6	14	29	16	47	13	52	7	39
1—7	—	—	—	—	—	—	—	—
1—8	—	—	1	3	—	—	—	—
計	48	100	34	100	25	100	18	100

次に年雇 (le prolétariat rural gagé) の場合をみよう。

まず、特別の技能をもたない年雇たち (des domestiques non qualifiés) の状況をみると、その社会的移動は第12表 (次頁) 如くであった。

そして、この中で特に昇進部分についてだけその道順を示すと、第13表の如くである。

この第13表についてのユブシエルの解説。

「道順3及び6が彼等の選択であり、小農

17) Hubscher, L'Agriculture……, p.795。

18) Hubscher, L'Agriculture……, p.795。

第12表

期 間	安 定		昇 進		低 落	
	絶対値	%	絶対値	%	絶対値	%
1851—1872	7	64	4	36	—	—
1872—1881	12	80	3	20	—	—
1881—1891	21	91	1	4.5	1	4.5
1891—1911	8	67	2	16.5	2	16.5

第13表

道 順	昇進人員中の%	構成員総数中の%
1—2	20	5
1—3	30	7
1—4	10	2
1—5	10	2
1—6	30	7

(ménager) とか職人とかいう身分は嫌われている。一般にどの部門も他の諸部門に対するその優越性を明確には確立していない。農場年雇賃金の足取り、物の考え方の諸現象が、日雇労働者のそれに較べてかなりに独自性のある前に述べておいた全体的な動向を理解させる。日雇労働者は1851年から1881年の間に60%の賃金増加の恩沢に浴したが、年雇賃金は3倍に増えた。さらに、恐慌の衝撃はこの2つの身分に同じように作用してはいない。1881年から1891年の間に、日雇労働者の賃金は12%も低下したが、年雇のそれは4%しか低下しなかった。こうした詳細は、主として恐慌の期間中にも低落が殆んど取るに足りない程度にしか生じていないことと、昇進が稀れであったこととの理由を説明する。……

1891年以後になると、問題はもっと複雑になる。一方で、賃金は上昇運動を取戻すが往時のような力動性を回復出来ない。大戦前の諸年次には、その天井打ちの傾向は明白であり、昇進の二番草を生ぜしめる。他方で、若干数の年雇達は、われわれが前に強調しておいたように、

日賃労働者になった。こうした《身分》の変更は、その正当性を賃金の動向によっては何ら説明しえないのであって、それとは別の要因を考慮することによって、その意味の把握が始めて可能になる。農場年雇が、自らの職業の恩知らずの性質に当然にも不満を抱くということは起りうる。年雇達の一部が、日雇労働者になって独立性を獲得するという道を選ぶのはその故である。こうした身分変更が1881年から1911年の間に、関係人員の3/4について生じたとしても、偶然ではない。この時期には、農村の下層民大衆は最良の状況におかれていた。経営者は、もはや嘗てのようには広大なスパンの労働力を自由にし得なかったし、彼等の労働者達と今迄よりも多く和解せざるを得なかった。労働者達は、この頃以後、雇主に對して今迄程は從属的ではなくなったし、同時に、雇用の確実性を保証されているようになった。

社会的昇進に関して言えば、19世紀の最後の1/3期以降、それは土地の労働やその諸強制やとの明白な断絶として受取られていたように思われる。かくして、彼等は小農(ménager)や役畜持ち農民(cultivateur)になるよりも、むしろ労働者(ouvrier)や田園監視人になる方を好んだ。こうした行動は、日雇労働者達のそれとはひどく違っている。』¹⁹⁾

次に、特別の技能をもった年雇、特に羊飼に(bergers)ついて見よう。

羊飼達の行動は、前にみた何の技能もない年雇達のそれとは異なる。全期間を通じてみた場合、事例の60%において昇進が支配している。但し、年次期間別の状況は第14表の如くである。

19) Hubscher, L'Agriculture……, pp.798~799. なお、私がユブシェルの新著に疑問を持つ点があるというのは、特にこうした結論についてである。

第14表 羊飼の社会的移動

期 間	安定(%)	昇進(%)	低落(%)
1851—1872	50	50	—
1872—1881	25	50	25
1881—1891	40	40	20
1891—1911	—	100	—

なお、一般の年雇 (domestiques de cour) の場合とは違って、上昇した羊飼達の場合には、その殆んど (事例の90%) が農業的な活動を持続している。彼等は、主として、尤もかなりに遅れた年齢、すなわち50歳ないし60歳になってだが、役畜持ち農民 (cultivateurs) の職業に就く (第15表参照)。

第15表 羊飼の昇進の道順

道 順	昇進人員中に占める%	構成員全体に占める%
1—4	22	13
1—5	11	7
1—6	56	33
1—7	11	7

× × ×
ユブシエルはこの後、小農 (ménagers) 階層、役畜持ち農民 (cultivateurs) 階層、富裕な役畜持ち農民 (cultivateurs aisés) 階層、最後に地主 (propriétaires et rentiers) 階層についても、同じようにその社会的移動について分析し、その結果を詳細に提示しているが、われわれの差し当りの関心は農業労働者と農業年雇だけにあるので、この4つの階層についての部分は、わたしの手で第16表にまとめておくに止める。

(六)

ユブシエルの新著の提示する以上のような内容について、私は少なからぬ不満を抱いている。とりわけ、農業年雇の社会的・職業的移動を扱った部分 (特に本誌第12頁に引用した部分) に、納得がゆかない点が多い。彼は日雇労働者の社会的・職業的移動については、「日雇労働者の昇進の56%を道順4と6で占めて」おり、これ

第16表

農 民 階 層	期 間	絶 対 値			%		
		安定	昇進	低落	安定	昇進	低落
小農 (ménagers)	1851—1872	16	11	8	46	31	23
	1872—1881	16	20	11	34	43	23
	1881—1891	11	10	2	48	43	9
	1891—1911	1	3	2	17	50	33
役畜持ち農民 (cultivateurs)	1851—1872	64	9	7	80	11	9
	1872—1881	109	10	9	85	8	7
	1881—1891	125	8	11	87	5.5	7.5
	1891—1911	81	2	6	90.5	2.5	7
富裕な役畜持ち農民 (cultivateurs aisés)	1851—1872	16	5	—	76	24	—
	1872—1881	21	3	2	81	11.5	7.5
	1881—1891	18	3	—	86	14	—
	1891—1911	15	1	—	94	6	—
地主 (propriétaires et rentiers)	1851—1872	12	—	2	86	—	14
	1872—1881	17	—	1	94	—	6
	1881—1891	8	—	2	80	—	20
	1891—1911	6	—	—	100	—	—

は直接に「農業的」な「経営主へ」と導く道順であるとし、さらにまた特別技能年雇(羊飼)の殆んど(60%)が役畜持ち農民への昇進を遂げるにも拘わらず、こと一般年雇については、「土地の労働やその諸強制やとの明白な断絶」を好み、小農民や役畜持ち農民ではなく労働者(ouvrier)や田園監視人への道順を選ぶ、と言う。一般年雇の場合だけに何故このような違いが生じるのか。

それは確かに、一定の手続きの下に統計的資料に依拠して導き出された客観的な結論であり、決して彼の恣意的な主観にもとづく結論ではないであらう。然し乍ら、こうした納得のいかない結論が導き出されるに至ったのは、あるいはユブシエルの採用している調査方法それ自体に欠陥があるからではないだらうか、と私は考える。そこで、以下、彼の調査方法そのものに対する私の疑問点を述べ、この稿の結びに代えたいと思う。

ユブシエルの農村調査方法に対する私の最大の疑問点は、彼の調査報告の中で極めて重要な役割を演じている前出25村落の選定方法それ自体にある。

ユブシエルは、前にみたように、政府による公式の農業統計や人口統計だけでは十分な調査が望めないとし、パ・ド・カレ県全域の中から25の村落を選定して、その1851年、1872年、1881年、1891年、1911年における住民名簿を利用してヨリ立入った分析を行うという方法を採用している。然し、問題はこの25村落の選定方法である。

ユブシエルは言う。「その変化(variations)を可能な限り正確に捕捉する為に、われわれはここで、農村人口という概念を人口調査の場合より一層厳しい制限の下において考えている。人

口移動の大きさを不自然に強めることがないように、都市化の過程に参入せしめられている村落(les villages engagés dans un processus d'urbanisation)は取除かれている。その住民数が2,000人に達しないような小郡^{カントン}の首邑についても同様である。」²⁰⁾

さらにこの引用個所に注して言う。「これは、農村人口を、空間的には変化のないように限定して考察するということである。何らかの時点で住民数2,000人の閾(しきい)を超えたコミュニティは、われわれの調査の全期間において考察の対象として取上げられない。……境界をこのように画定されることによって、農村人口は、ほぼ60年間にわたって、就中1881年以降、著しい安定性(1%の減少)を示す。」²¹⁾

然し乍らユブシエルは、こうした選定基準に従って選ばれた25コミュニティ(communes)〔ユブシエルはこれを、nos vingt cinq localitésと呼んだり(p.791), 25 villages précédemment choisisと呼んだり(p.681), 自由な表現をしている——湯村〕なるものが、果して何処の何という村であるか、その具体的な村名を明らかにしていない。〔p.681で上記25村落の半分についてだけは、Autingues(Ardres^{カントン}小郡), Barastre(Bertincourt), Behagnies(Bapaume), Boursin(Guînes), Canlers(Fruges), Clenleu(Hucqueliers), Escalles et Frethun(Calais), Hauteclouque, Monchaux et Troisvaux(St-Pol), Lebinghen(Marquise)であることを明らかにしているが——湯村〕。

然し、その点は差し当り我慢するとしても、「農村の人々の社会的・職業的移動」を考察しようという時に、「都市化の過程に参入せしめ

20) Hubscher, L'Agriculture……, p.649.

21) Hubscher, L'Agriculture……, p.649.

られている村落」を除外して「著しい安定性」を示す村落だけを選んで調査するというユブシエルのこの方法は、それ自体が根本的に間違っていると私は考える。なぜなら、われわれがここで考察しようとしているのは19世紀フランス農村に対して「都市化の過程」が及ぼす影響であるにも拘わらず、その肝心の「都市の過程に参入せしめられている村落」を除外して「著しい安定性」を示す村落だけを選んだのでは、本来の調査目的に全く添わない結果が出てくるのは自明のことだからである。

次に私が不満とするのは、1851年、1872年、1881年、1891年、1911年という特定の年次の住民名簿だけに依拠して分析を行うというその調査方法のもつ重大な、全く致命的とも言える誤りである。住民名簿によるこうした調査の場合、女性の労働者や年雇たちの社会的・職業的移動を追跡し得ないことはユブシエル自身も認めている。(p.791) なぜなら、住民名簿は当該年次における当該人物の氏名、居住地、年齢、世帯主・配偶者・子供達の職業だけをしか教えてくれず、結婚によって姓の変る女性の場合、その社会的移動の追跡が困難だからである。ユブシエルはさらに、男性の場合にも、調査年次と調査年次との間で多数の人々が死亡したり行方が掴めなくなったりしている場合が多いことを慨いている。かくして、総数 4,946 枚のカードの中から 1,505 枚のカードだけしか、すなわち全体の30%についてだけしか調査を進めることが出来なかった。これは「確かに、極めて重大な脱落である」、とユブシエル自身が認めている。(p.792)

こうした重大な脱落が生じるのは何故か。私はそれが、調査方法それ自体のもつ重大な欠陥のせいであると考え。農業年雇の社会的・職

業的移動の跡を追うのに、特定の村落の住民名簿だけに依拠するのは間違いであると考えらるからである。それと言うのも、私がこれまでに幾つかの論文の中で指摘しておいたように、農業年雇は、彼の生家の位置する村落それ自体の内部においてよりもむしろ、その近隣の村落内に位置する農家に雇われる場合が多いからである。

例えば、農業年雇に関する極めて秀れた研究書であるアン・カッスマール著『近世イングランドにおける農業年雇』(Ann Kussmaul, *Servants in husbandry in early modern England*, Cambridge University Press, London, 1981.)は言う。

「小規模農業者と同様に大規模の農業者もまた、彼等の息子や娘を年雇奉公に出した。経済的な必要は彼等の直接の動機ではなかった。なぜなら彼等は、彼等の家庭の経済的生活の中でそれ等の息子や娘が果していた役目を代替させる為に、年雇を雇い入れたのだから。年雇達の方が農業者自身の子供達よりも、心理的に気楽に訓練出来た。……ピンチベックとヒューイットは、年雇奉公を《家族感情によって品位を落されることのない訓練》と呼んだ。マーシャルは、ミッドランド地方の諸州の大農業者達は、彼等の息子達を、彼等の父親の居住地から若干離れた処に位置しているヨリ上級の農業者達の許に、《生徒》(pupils)として送り込んだ、と書いている。」²²⁾

なお、カッスマールはむしろイングランドにおける年雇事情について述べているわけだが、事情は勿論フランスにおいても同様である。例えば、フィリップ・ボシスの論文「アンジュー、ポワトゥ、及びブルターニュの境界地域におけ

22) Ann Kussmaul, *Servants in husbandry*……, pp.76~77.

る農民社会」(Philippe Bossis, *Le milieu paysan aux confins de l'Anjou, du Poitou et de la Bretagne*, 1771~1789. *Etudes rurales*, N° 47, 1972) は、ポワトゥ地方の農家について述べた個所で言う。

「モージュ地方と下・ポワトゥ地方のボカージュ地帯では、数百ボワスレ、換言すれば約10ヘクタールの規模のメテリの経営は、多数の労働力を必要とする。若干の場合には、3世帯のラブルールが同じカマドの周りに生活した。……(それにも拘わらず——湯村)、それより若くま

だ独身の娘や息子は常にそのメテリ内に居住しているとは限らず、一般に、青春から隣接教区にあるラブルールのところに年雇や年雇女として住込む。」²³⁾

年雇労働力の実態がこのようなものであったとすれば、ユブシエルのように調査対象を特定村落の住民名簿だけに限るような調査方法が、如何に間違った結論を導き出すかは明白であらう。

23) *Etudes rurales*, N° 47, p.123。